

『注文の多い料理店』が教えてくれたこと

弘前市立福村小学校 小笠原 香穂

私は、この本のタイトルがとても気になります。一般的に、注文の多い客が言葉としては正しいと思います。でもこの本は、注文の多い料理店です。料理店が注文？と不思議に思い、この本に興味を持ちました。

宮沢賢治の作品の多くは、彼の故郷であり、理想郷でもある岩手を舞台に書かれています。この作品も、都会から遠くはなれた山の中をイメージして創作されたのでしょうか。大正時代にできた作品とは思えないほど、異国情緒あふれる絵画的な要素をたっぷりもりこんでいるにもかかわらず、とても考えさせられる作品でした。このお話の主人公は、二人の若い紳士だと考えられます。その二人は、遊びのように次々狩猟していきます。また、一緒にいた白くまが目の前で死んでも、お金のことしか考えていませんでした。二人が気づくこと、かれらの案内人とはぐれていました。かれらはどうすることもできず、ひたすら歩いていました。すると、目の前に立派な洋風の料理店が見えてきました。かれらは、そこに吸い込

まれるように中に入りました。でもその中には、おいしい料理や、お店の人もいません。そこには、「服をぬいで、くつのどろをおとして、牛乳クリームをぬりなさい。」などと書かれたはり紙と、ドアしかありませんでした。さすがに、かれらは様子のおかしさに気づいていました。怖くなつて逃げようとしても逃げられません。そんなところに、山猫がやってきました。ナイフを持ち、ナプキンをかけ、かれらを食べる気満々です。かれらは、泣きぐずれてしまいました。すると、さつき死んだと思つた白くまが助けにきてくれました。その白くまのおかげでかれらは助かったのです。かれらは、どんな思いだったでしょう。感謝してもしきれないと私は思いました。

私はこの本を読んで大切だなと思つたことは、命の大切さです。最近、罪のない生き物が深く考えない人間に殺されていく話を聞き、かれらは、どんな思いで罪のない生き物を次々と殺しているのだろう。と不思議に思います。その生き

物は、私たちにどんなものをあたえてくれているのか知った上で、殺しているのでしょうか。その生き物が絶滅したら私たちの平和な日常がこわれるかもしれない。そのくらい深く考えているのでしょうか。それは人間でも、最近いろいろな殺人事件があります。自分にとって他人でも、だれかにとつて大切な家族かもしれない。そのことを世界中の人に知って

もらいたい。私には関係ない。じゃなくて、私にできることではないか。という考えを持つ人が多くなれば、この世界はもっとよりよくなると思います。私は、将来いろいろな人の命と向きあつて、いろいろな人を笑顔にする医者になりたいです。そして、この本で学んだ命の大切さをもっといろんな人に教えたいです。